

北代縄文館ミニ企画展

# 長岡杉林遺跡Part1

## 長岡杉林遺跡の位置 (図1)

長岡杉林遺跡は、長岡丘陵上の標高約15～20mに所在します。遺跡の北側は、北東に伸びる緩やかな傾斜の谷に面します。南側は幅約100m、高低差約5mの大きな谷が西に伸び、谷部には大畑池などのため池があり、豊富な湧水があったことを示しています。また、長岡杉林遺跡の西方、約200mには、北代遺跡が所在します。

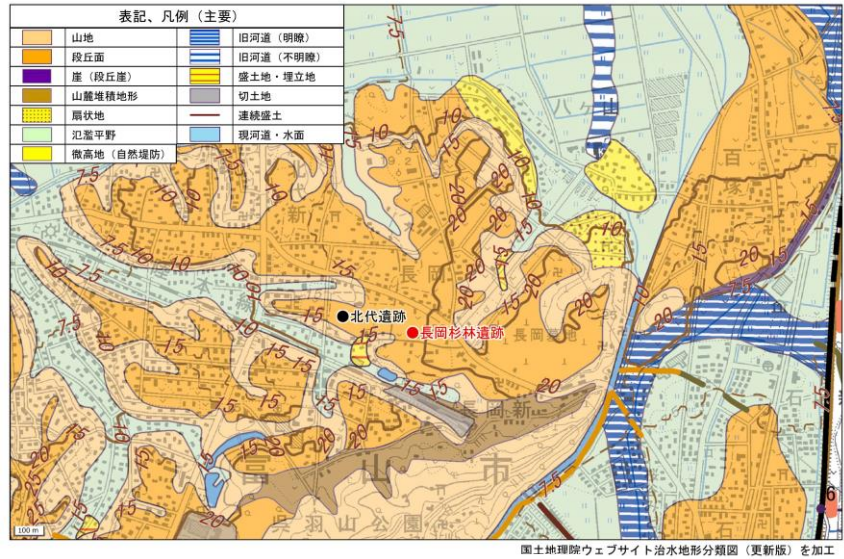


図1 地形分類図

## 長岡杉林遺跡の概要 (図2)

長岡杉林遺跡は、縄文 (早期・中期・後期・晩期)、弥生、古墳、奈良、平安時代の長きにわたり営まれました。昭和61 (1986) 年度の調査では、縄文時代後期の竪穴住居跡1棟、奈良時代及び平安時代の竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡6棟、井戸跡1基等を検出しています。遺物は、縄文土器等のほか、奈良、平安時代の土師器<sup>はじき</sup>、須恵器<sup>すえき</sup>等を多数検出しています。遺構や遺物の検出状況等



図2 縄文時代の深鉢

から、長岡杉林遺跡は、奈良・平安時代を中心に栄えた遺跡といえます。

## 縄文時代の長岡杉林遺跡 (図3・4・5)

昭和61年度の調査では、調査区の東寄りで縄文時代後期の竪穴住居跡 (以下住居跡) を1棟検出しました。住居跡の平面形は、西側半分は失われていますが半円形と考えられ、大きさは、長径約4m、短径約3.6mです。

住居跡の西側半分が失われているためはっきりしませんが、柱穴と考えられるものは、径約30cm、深さ14～18cmで3か所あります。

石組炉が住居跡中央に位置し、10～20cm大の円礫等を方形に組み、大きさは長辺55cm、短辺45cmです。また、炉内には深鉢の底部が横置きしてあり、底面（径12.6cm）には網代圧痕（土器を作った時に敷かれていた、編み物の跡）が残っています。

炉の南西にある隅丸方形の穴（P45）は、土師器甕片を検出しており、奈良時代のものです。

発掘調査で検出した土器は、早期・中期・後期・晩期のものです。土器の分布傾向に大きな特徴はありませんが、調査区の北西と南東からの検出は少ないようです。

住居跡は、縄文時代後期の1棟以外の検出が無く、調査区の東側に存在する可能性も低いようです。このため、住居跡は、単独もしくは広い範囲の中に点在する生活様式を示すものと考えられます。

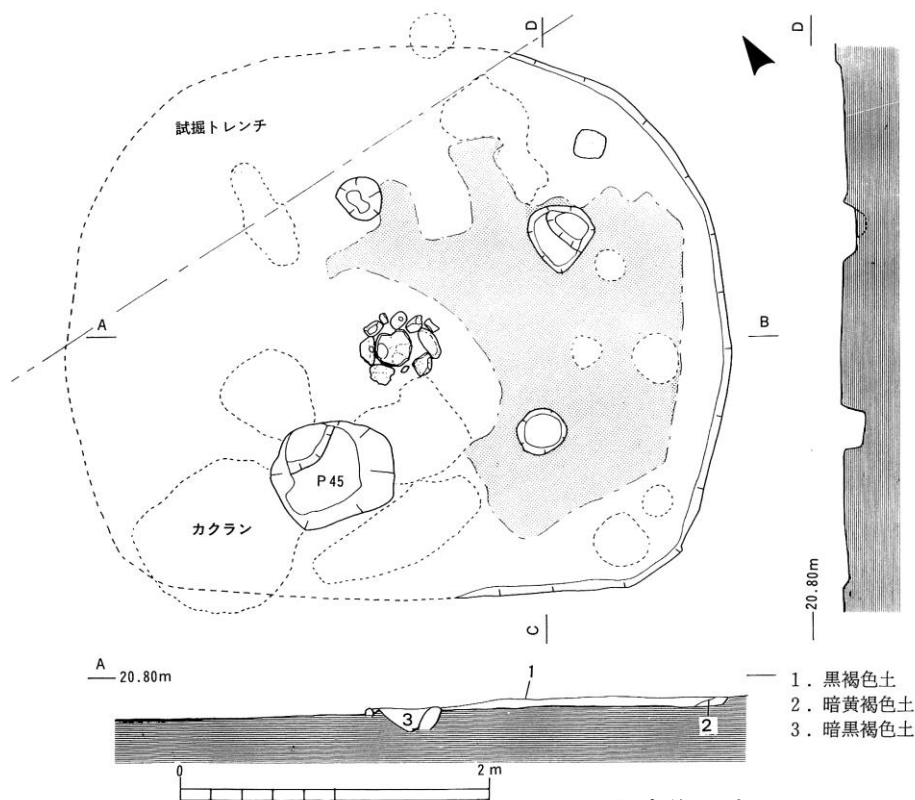


図3 竪穴住居跡 平・断面図

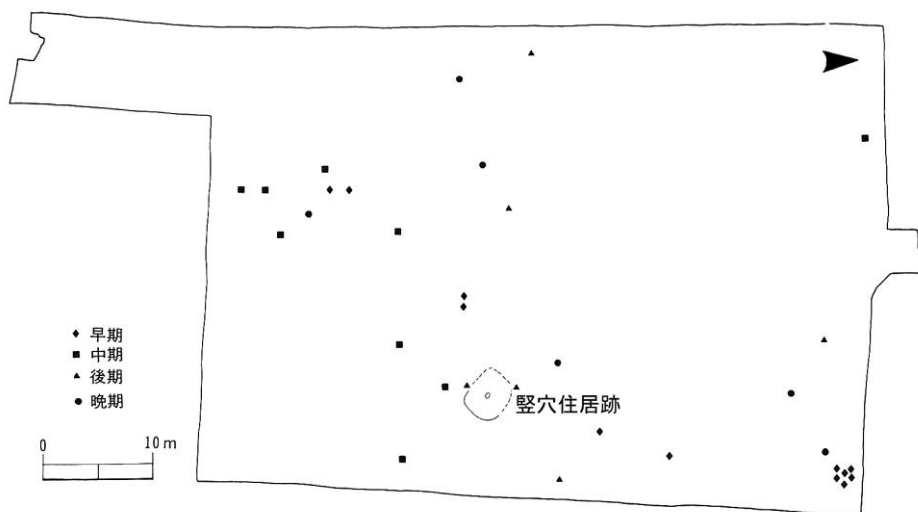


図4 縄文時代の遺構と土器分布



図5 網代圧痕

## 主要引用・参考文献

- 富山市教育委員会 1987 『長岡杉林遺跡』  
 富山市教育委員会 1997 『史跡北代遺跡発掘調査概要』

<https://www.city.toyama.toyama.jp/etc/maibun/index.htm>